國學院大學学術情報リポジトリ

中古和文の終助詞ナ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 宏太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000952

中古和文の終助詞ナ

富岡　宏太

キーワード：中古和文　終助詞　ナ　個人的見解や認識　確認

一　本稿の目的

中古和文には、「詠嘆・感動」「強意」を表す終助詞が多数見られる。しかし、それぞれの意味や用法が十分に詳らかになっているとは言えず、なお検討の余地がある。本稿で注目する終助詞ナもその一つである。

（1）「さりとも、これに御心なぐさめたまひてむな。……」　〈夜の寝覚、巻四、二八六〉

（1）のナはひとまず、「ね」と訳しておけば問題ないが、訳出できたからといって、その意味が明らかになったとすることはできない。そこで本稿では、特に上接語句に注目して、ナの意味を明らかにすることを目的とする。本稿の構成は次のとおりである。まず、二節では調査資料および調査対象を示し、主な先行研究と残された問題点について述べる。三節ではナの上接語の統語的特徴や、上接句の意味的な特徴を指摘する。さらに四節では、以上の調査結果や先行研究を踏まえ、ナの意味について考察を行なう。

なお、用例の引用文中の〔　〕は話し手と聞き手とを、《　》は心内文であることを、（　）は補足説明を示すため、筆者が付した。引用部末の〈　〉内は、出典、巻名（数）、使用テキストの頁数である。

二　議論の前提

二・一　調査資料と調査対象

資料には、落窪物語、枕草子、源氏物語、夜の寝覚、狭衣物語を用いた（注1）。調査対象は、いわゆる「詠嘆」「強意」の終助詞ナの例である。前の三作品は国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』で検索したのち、本文にあたる方法をとり、後の二作品は、目視による調査を行なった（注2）。表記は私に改めてある。また、韻文と散文の傾向差を考慮し（注3）、散文の例のみを使用する。さらに、トナ・カシナなど、助詞が上接する例は、上接助詞の影響により、特別な用法を持つ可能性を否定できないため、参考程度に扱い、例数からは除外する。

以上に加えて、ナ特有の問題もある。発話末に用いられ、引用の「と」が下接する例にも、注意が必要であるということである。

（2）a〔女房→女房〕「何事ぞ」、〔女房→女房〕「右の大臣のことなりな」とのたまへば、……。

〈落窪物語、巻二、一九四〉

b〔女房→女房〕「対の御方の参りたまふな」と問へば、……。　〈夜の寝覚、巻一、一〇一〉

底本にカギ括弧や句読点は存在しないから、（2）aは「「右大臣のことなり」などのたまへば」のように、発話文に助詞「など」が下接している可能性が残り、ナの確例とは言えない。そのため、調査対象から外す。一方、（2）bは直後の地の文に「問へば」とある。「「連体形終止文」など問ふ」の例は見られず、「「ナで終止する文」と問ふ」の例は見られるから、こちらはナの確例と言える。よって、例数に含めた。結果、総例数は七二例となる。例数を［表一］にまとめる。

［表一］

2	落
1	枕
32	源
24	夜
13	狭
72	計

二・二　先行研究と問題点

次に、終助詞ナの先行研究の指摘を確認していく。古く、

富士谷成章『あゆひ抄』（一七七六）は「人に言ひかくる言葉ながら、思ひあまりてはひとりごとにも言ふべし」（巻一・詠）としている。これを言い換えると、次のようになる。

①会話・消息など、対人場面での使用に偏り、独り言や心内文など、非対人場面にもわずかに使用される。

これは事実の指摘として重要であり、同様の指摘は、此島正年（一九七三）にもある。これらを受けた森野崇（一九九〇）は、ナについてより詳細な調査を行なっている。森野はナを聞き手の位相、上接語句、情報の帰属先といった観点から検討し、次の三点を明らかにした。

②聞き手が話し手と同等か下位である場合にしか使用されない。

③ナの上接助動詞は、主体的表現（筆者注：推量・推定の助動詞）に偏る。

④聞き手の方がよく知っている、もしくは話し手と聞き手とが同等に知識を有している場合に使用される。

そのうえで森野は、

その結果、「な」は、聞き手の方がより正確に把握していると想定される事柄（情報）に関して、聞き手に確かめ、同じ認識を得ようとする場合に用いられる助詞だと分析された。（六〇頁）

と結論している。

以上の先行研究の指摘のうち、①と②については首肯されるが、③④については、なお検討の余地がある。大きく、次の二点である。

まず③は、「主体的表現」とひとまとめにされる助動詞群についてである。この語群の中で、分布の違いはないか、もし違いがあるとしたらその分布が何を意味するのかについて、考える必要がある。

また④についても検討の余地がある。これはナの用例を検討したうえで、神尾昭雄（一九九〇）の「情報のなわばり理論」を参考に考え出されたものである。神尾の指摘について説明する。用例中の「φ」は、助詞が下接しないことを、「#」は語用論的に不適格であることを示す。

（3）「実は今日、僕の誕生日なんだ［φ／よ／#ね］」

（4）「あなたの誕生日は今日です［#φ／#よ／ね］」

（3）は話し手の誕生日に言及するから、情報や知識は、話し手自身に帰属している。この場合、終助詞を使用しなくても、聞き手への伝達目的で「よ」を使用しても構わないが、「ね」を使用するのは不可である。一方、（4）は聞き手の誕生日を話題にしたものである。この場合、助詞を下接させない例や「よ」を使用した例の方が不自然となり、「ね」は必須の要素となる。これは、「ね」が聞き手のなわばりにある情報に言及する際に使用される助詞であるからだと説明される。森野はこの考え方を参考にして、古典語のナの分析を行なうのである。

（5）〔源氏→明石の君〕「さらばその（＝明石入道ノ）遺言ななりな。消息は通はしたまふや。……」

〈源氏物語、若菜上、④一二七〉

（6）〔源氏→惟光〕「憎しとこそ思ひたれな。……」

〈源氏物語、夕顔、①一四〇〉

（7）〔源氏→玉鬘〕「さてかかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。いみじくけ遠き、ものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきしたるは世にあらじな。……」

〈源氏物語、蛍、③二一三〉

（5）は、聞き手・明石の君の持っている文箱の中身が、出家した明石入道の遺言かどうか、源氏が推測した例である。ここで文箱の中身について最も知識を有しているのは、持ち主であり、聞き手でもある明石の君である。また、（6）も、聞き手である惟光が「憎し（＝みっともない，気に入らない）」と思っているか否か、その真偽について、最も知識を有するのは、惟光自身である。これらの例は、聞き手の方がよく知っている事柄に言及しているといえよう。それに対し（7）は、源氏と玉鬘とが、物語に関して語り合う場面である。この場合、源氏も玉鬘も物語を熟読していると考えられるから、「玉鬘のような態度をとる姫君がいるかどうか」は、両者ともに把握していると言える。すなわち、話し手と聞き手とが同等に知識を有している例である。これらの例は確かに、情報の帰属先による説明が可能である。

ところがナには、この観点から説明されるのが躊躇われる例もある。

（8）〔源氏→紫上〕「花といはば、かくこそ匂はまほし

けれな」　〈源氏物語、若菜上、④七一〉

（9）〔桐壺帝→藤壺〕「今日の試楽は、（源氏ノ舞ッタ）青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」　〈源氏物語・紅葉賀、①三一二〉

（10）〔源氏→夕霧〕「いとかかるころは、遊びなどもすさまじく、さすがに暮らしがたきこそ苦しけれ。宮仕する若き人々たへがたからむな。帯も解かぬほどよ。……」　〈源氏物語、常夏、③二二四〉

（8）は、「花というからにはこのように香ってほしい」という源氏の願望である。話し手の願望について、聞き手の方がよく知っているとか、同等に知識や情報を持っていると考えるのは不自然である。次に（9）は、桐壺帝と藤壺とが、今日見た紅葉賀の試楽（＝リハーサル）について語っている場面である。森野は、藤壺も一緒に試楽を見ていたことをもって、話し手と聞き手とが同等に知識を有する例としている。しかしこの例は、事態についての情報そのものではなく、源氏の舞が圧倒的に素晴らしかったという、帝の評価が問題なのである。帝の評価について藤壺の方がよく知っているとか、同等の知識を有しているとは言えないから、やはりこれも情報の帰属先から説明するのは不可能に思われる。このように見ると（10）も、情報の帰属先から説明するのが躊躇される。この例は第三者の心情を推測する例であり、話し手と聞き手が同等に知識を有しているとしてよいかどうかわからない。このように、情報の帰属先によってすべての例を説明することはできず、異なる観点から考える必要があるのである。

以上、本節では先行研究を概観し、上接語についての詳細な調査と、情報の帰属先に基づく説明に代わる案が必要となることを示した。

三　調査

三・一　ナの上接語

ではまず、上接語からナの特徴を探っていこう。上接品詞は、名詞が一例、形容詞・形容動詞が四例、動詞五例、助動詞六二例である。このうち助動詞の例数を、［表2］にまとめる。

［表2］

ナ	
11	む
12	らむ
2	けむ
4	じ
12	めり
3	推伝なり
1	まほし
11	けり
1	き
2	ず
1	ぬ
1	断定なり
1	たり
62	計

この表のうち、ナの上接例数が一〇以上の助動詞に注目する。すなわち、「む」「らむ」「めり」「けり」である。

三・一・一　推量・推定の助動詞について

まずは推量・推定の助動詞について見る。これらの助動詞は森野の指摘通り、多く見られる。このうち、推量の助動詞（む・らむ・けむ・じ）では特に、「む」と「らむ」にナが下接した例が多いのが特徴である。

（11）〔源氏→夕霧〕「いとかかるころは、遊びなどもすさまじく、さすがに暮らしがたきこそ苦しけれ。宮仕する若き人々たへがたからむな。帯も解かぬほどよ。……」　〈源氏物語、常夏、（10）の再掲〉

（12）〔源氏→紫上〕「今宵ばかりはことわりとゆるしたまひてむな。これより後のとだえあらんこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。……」　〈源氏物語、若菜上、④六四〉

（13）〔狭衣→山伏〕「あり所は知りたまひたらむな。幼き人や具したりし」と、せめてゆかしく思されて、問ひたまへど、……。〈狭衣物語、巻二、二一三〉

（14）〔源氏→紀伊守〕「伊予介はかしづくや。君と思ふらむな」　〈源氏物語、帚木、九七〉

（15）〔中納言〕《あはれいかなる報にて、この人、かくのみ思はずなる世をみだれ思すらんな。……》　〈夜の寝覚、巻四、三〇六〉

（16）〔道成→見送り人〕「中納言殿の人々は、帰り参りね。大弐殿は、今は鳥飼などにやおはしぬらむな。中納言殿の御物忌、いときびしかりつれば、とみにも、え出でで、かく懈怠しつるなり。……」と言ひて、……。　〈狭衣物語、巻一、一〇二〉

（11）～（13）は「む」に、（14）～（16）は「らむ」にナが下接した例である。この、「む」「らむ」に下接した例だけで、助動詞に下接する例全体の三分の一を占める。

一方、推定の助動詞（「べし」「まじ」「めり」「推定伝聞

なり」）では、「めり」に例数が集中するのが特徴で、他には「推定伝聞なり」の例がわずかに見られるのみである。

（17）「……」とのたまへば、大臣うち笑ひて〔源氏→紫上〕「つれなくて、人の御容貌推しはからむの御心なめりな。さて、いづれをとか思す」

〈源氏物語、玉鬘、③一三五〉

（18）〔内大臣→寝覚〕「……。これは、いみじう諌めきこゆる事とも思さぬなめりな。又きく人もあらましと、聞き過いてあらましや」

〈夜の寝覚、巻四、二九八〉

（19）「……」と聞こえたまへば、うち笑ひたまひて、〔源氏→大宮〕「いとおよすけても恨みはべるななりな。いとはかなしや。……」

〈源氏物語、少女、③二三〉

（17）（18）は「めり」にナが下接した例、（19）は「推定伝聞なり」にナが下接した例である。なお、「べし」「まじ」にナが下接した例は見られない。

三・一・二　過去の助動詞について

次に過去の助動詞についてである。この中では、「けり」の多さが注目される一方、「き」の例は孤例である。

（20）「宮の御琴の音は、いとうるさくなりにけりな。いかが聞きたまひし」

〈源氏物語、若菜下、④二〇四〉

（21）「まだ、（若宮ハ）大殿籠らせたまはぬなりけりな。大将殿は出でさせたまひぬるか」と聞こゆれば、……。

〈狭衣物語、巻三、三二〇〉

（22）〔内大臣→女一宮〕「こはいかに聞えさせたまへるぞ。もとの心は聞えさせはべりにきな。幼き人の、かの入道に琴ならひに月ごろあらせはべりつるを、よべ率てわたしはべりにしに、いまひとりも、今はやうやうおよずけまかるを、よそにはなちたるやうにてはべるも心苦しくて、……」

〈夜の寝覚、巻五、三七六〉

このように、過去の助動詞にも分布の異なりが見られるのである。

以上をまとめると、次のようになる。

・ナの上接助動詞の分布を確認すると、推量の助動詞「む」「らむ」の例が多く、推定の助動詞では、「めり」の多さが注目される。これに対し「べし」や「まじ」が上接した例は見られない。一方、過去の助動詞では、「けり」の上接例が多く、「き」は孤例である。

この事実の意味するところについては後述する。

三・二　「情報の帰属先」と修正案

次に、④の「情報の帰属先」に対する修正案を提示したい。すでに示したように、情報の帰属先の観点からナについて説明することには問題があった。そこで本稿では、ナの上接句の特徴について説明していくことにしたい。具体的には、話し手の推測や評価、願望や希望などの個人的見解がほとんどであるということである。

(23)〔薫→宿直人〕「いかにぞ。(八の宮ガ)おはしまさで後、心細からむな」など問ひたまふ。

〈源氏物語、椎本、⑤二一一〉

(24)〔定子→清少納言〕「めでたしな。いみじう今日の料に言ひたりけることにこそあれ」

〈枕草子、一二九段、二四三〉

(25)「花といはば、かくこそ匂はまほしけれな」

〈源氏物語、(17)の再掲〉

(23)は、宿直人の心情を推測しての発話である。当然、「心細くない」という回答があってもおかしくない。ここまでに挙げてきた例も、推量・推定の助動詞が使用されているか、話し手には知りえない情報や、他者の心情に直接言及しているかのどちらかであるから、これに該当する。次に(24)は、定子の評価であり、実際には、清少納言は同じ認識を持っていないことがありうる。(25)は話し手の願望の例で、やはり、聞き手は異なる認識を持っていてもおかしくない。

また、次の五例は一見すると、事実を指摘しているだけであるが、個人的見解の範疇で説明できる。

(26)今朝より参りて、侍所の方にやすらひける人々、今ぞ参りてものなど聞こゆる中に、きよげだちて、なでふことなき人のすさまじき顔したる、直衣着て太刀佩きたるあり。御前にて何とも見えぬを、〔女房→女房〕「かれぞこの常陸守の婿の少将な。はじ

めはこの御方にと定めけるを、守のむすめを得てこそいたはられめなど言ひて、かじけたる女の童を得たるななり」　〈源氏物語、東屋、⑥四五〉

(27) 思ひよるべきことならねば、〔女房→女房〕「対の御方の参りたまふな」と問へば、……。　〈夜の寝覚、巻一、一〇一〉

(28) 〔帝→まさこ君〕「今宵、母のもとにこそ寝たりけれな」と問はせたまへば、……。　〈狭衣物語、巻四、二五四〉

(29) 〔内大臣→寝覚〕「（アナタ様ハ）いとよく人をこそ、すかし出でさせたまひけれな。心やはらかに、はた慣はしたまへるぞかし。……」　〈夜の寝覚、巻四、二七二〉

(30) 〔内大臣→女一宮〕「こはいかに聞えさせたまへるぞ。もとの心は聞えさせはべりにきな。幼き人の、かの入道に琴ならひに月ごろあらせはべりつるを、よべ率てわたしはべりにしに、いまひとりも、今はやうやうおよずけまかるを、よそにはなちたるやうにてはべるも心苦しくて、……」　〈夜の寝覚、(22) の再掲〉

(26) は近くに見えている人物が少将であること、(27) は対の君が来たこと、(28) は、まさこ君がその母のもとで寝ていたこと、(29) は寝覚が自分をうまく言いくるめて追い出そうとしたこと、(30) は自分がかつて女一宮へ想いを伝えたことを述べていて、いずれも事実の描写に見える。しかし (26) は、直前の地の文に「御前にて何とも見えぬを」とある。つまりそこにいる人物が少将であるとは確信していないものと考えられる。また (27) (28) はいずれも、発話の直後の地の文に動詞「問ふ」が出現している。したがって (27) は現れたのが本当に対の君かどうか、(28) は本当にまさこ君が母君のもとで寝ていたのか、厳密には話し手は知らず、当て推量で述べていると解釈できる。(29) は、「いとよく人をこそ、すかし（＝とても上手に自分を言いくるめ）」たと述べるが、これは内大臣による皮肉であり、「上手に言いくるめる」意図が寝覚にあったかどうかはわからない。あくまで内大臣の見解である。最後に (30) は、内大臣のみが有している記憶である。記憶は一見事実に見えるが、他者と共有できない以上、極めて個人的な見解であ

る。以上の例は、個人的見解の範疇で説明できる。

さらに次に挙げる二例は、個人的見解とは言いがたいものの、それに準じるものとして考えることができる。

(31)〔源氏→若紫〕「あなにく。かかること口馴れたまひにけりな。みるめにあくは正なきことぞよ」

〈源氏物語、紅葉賀、①三三一〉

(32)〔源氏→紫上〕「月出でにけりな。なほすこし出でて見だに送りたまへかし。…」

〈源氏物語、須磨、②一八五〉

(31)は、若紫が和歌を用いて皮肉を言うようになったこと、(32)は月が出ていることについて述べており、個人的見解とは考えにくい。しかしながら、(31)(32)ともに、助動詞「けり」が使用されており、しかも、当該事態に今、気がついたという、気づきの用法である。よって、事態そのものを描写することではなく、それに気づいたという話し手の認識が重要な例と考えられる。

このように、ナの上接句は個人的見解で説明可能な例、および、事態に今気づいたという、認識に焦点があたる例に限られるのである。

四　考察

四・一　ナの意味について

では、話し手の個人的見解や認識に焦点のあたる句に下接したナは、いったいどのような意味を担うのであろうか。先行研究の成果と、本稿の調査を合わせて考える。まず重要なのは、次のような例が存在することである。

(33)〔帝→まさこ君〕「今宵、母のもとにこそ寝たりけれな」と問はせたまへば、……。

〈狭衣物語、(28)の再掲〉

(34)召し寄せて、〔源氏→惟光〕「ここは常陸の宮ぞかしな」〔惟光→源氏〕「しかはべる」と聞こゆ。

〈源氏物語、蓬生、②三四五〉

(33)は直後の地の文に「問はせたまへば」とあり、回答を望んでいることがわかる。「こそ―已然形」の係り結びの文が疑問を表すことはないから、回答を望むのは、ナによるものと考えられる。また、(34)は助詞が連接しており、本稿の直接の考察対象ではないが、ナで終止した文に、「しかはべる（そうです）」と応答している。「ぞ＋かし」で終

止した文に「指示詞＋あり」で応答した例はないから、この例もまた、ナが回答を望む場合にも使用されることを意味している。

一方、ナには、次のように疑問文の文末に現れた例もある。

（35）〔女房→女房〕「いかなりつらむな。いとらうたげなる御さまを。いみじう思すとも、かひあるべきことかは。いとほし」　〈源氏物語、東屋、⑥七四〉

このように見ると、（33）（34）のナも、疑問を表すわけではない。

ではどのような意味を担うのかが問題となるが、森野崇（一九九〇）は、ナの統語的な位置に注目している。具体的には、「終助詞が相互承接する場合、「な」は常に最後部に位置していた」（四七頁）ということである。たとえば、前掲の（34）では、ゾ・カシ・ナと三つの助詞が承接しているが、最下位に位置するのはナである。終助詞は相互承接の下位のものほど対人的意味が強くなるとされ、実際、ナの用例は会話文に集中している。つまり中古和文のナは、この時代の終助詞の中で、最も対人的意味の強い助詞なのである。

回答を求める発話に用いられるが疑問を表さず、対人的意味の強い助詞となると、確認の意を表すと考えるのが自然である。森野が、ナは「聞き手に確かめる」意を表すとしたのも、以上のような理由による。本稿も大筋では同様の考えである。ただし、ナには心内文の例も見られるから、必ずしも「聞き手に」とは言えない（注4）。また、聞き手側の情報を確認しているわけではないことも、既に見たとおりである。

そこで本稿では、ナが、「話し手の見解・認識についての確認」を表すと考えてみる。このように考えると、これまで見てきた諸特徴が説明可能である。

四・二　先行研究の指摘・調査結果との関係

四・二・一　先行研究で指摘される諸特徴について

ここでは、ナの意味と先行研究で指摘される諸特徴について考える。まず、会話文の例が圧倒的に多いことについてである。「話し手の見解・認識についての確認」がナの意味であると考える場合、確認の相手が必要となる。この相

手は通常、聞き手である。これにより、会話文の例が多くなる。その一方、話し手自身の中で、自らの見解・認識を確認することもありうる。この場合、典型的には心内文となるが、自身の見解について話し手自身が頭の中で確認しながら、対話することもなくはない。前に挙げた(31)(32)は、これに該当するものと考えられる。以上のように見ると、会話文の例が圧倒的に多く、心内文の例も見られることが説明できる。例数の差は、状況的にどちらがよりあり得るかによるものと考えられる(注5)。

次に、聞き手上位の例が見られない点についてである。この点について森野は、「聞き手側の事柄をかなりはっきりと述べ、もちかけていくという行為には、ともすれば、やや無遠慮な感じやなれなれしさといったニュアンスが生じるのではあるまいか」(五七頁)としている。この説明に矛盾はなくわかりやすいが、情報の帰属先から説明しない本稿の立場では、採用できない。そこで本稿では、「確認」ということについて、一歩踏み込んで考える。自身の見解や認識について確認するということは、話し手の見解や認識が、自身にとって不確実なものだということである。そうでなければ確認の必要がない。しかしその一方で、話し手はその見解や認識が他者(場合によっては話し手自身)に受容されるものであるとも考えているはずである。そうでなければ、確認ではなく疑問になってしまうからである。このように、「見解や認識の確認」を行なう場合、あくまで話し手個人の見解や認識に過ぎないものを、他者に受容される前提で述べることになるため、聞き手が上位となる例がないのだと考えられる。

四・二・二　上接助動詞の分布について

次に、調査結果との関係である。上接助動詞では、推量の助動詞が多く、推定の助動詞では「めり」のみが多いのであった。ナが「見解や認識の確認」を表す助詞であると考えるならば、このことは不思議ではない。推量する以上、話し手の見解や認識には不確実な部分があるはずである。この不確実な部分を埋めるために確認が行われる。一方、推定の助動詞は、何らかの根拠に基づき、話し手の推測を確かなものとして述べるものであるから、改めて確認する必要が生じない。そのため「べし」「まじ」にナが下接した

例は見られないのである（注6）。その中にあって、「めり」の上接例だけが多いのにも理由が考えられる。「めり」は視覚に基づく推定を表すが、そこには、「私にはこのように見えるが、そうでない可能性もある」ということが含意される。そのため確認の余地が十分にあり、ナが下接しやすいのであろう。

さらに、推量・推定の助動詞の中で、特にナへの上接例が多いのは、「らむ」「む」「めり」の三つであった。このうち「らむ」「めり」は、現状について推測するという点で共通している。

（36）〔源氏→紀伊守〕「伊予介はかしづくや。君と思ふらむな」〔紀伊守→源氏〕「いかがは。……」

〈源氏物語、帚木、①九七〉

（37）〔薫→姫君女房〕「例の、（姫君ハ）あなたにおはしますべかめりな。何わざをかこの御里住みのほどにせさせたまふ」　〈源氏物語、蜻蛉、⑥二七二〉

（36）は聞き手の現在の心中、（37）は聞き手が仕えている姫君の現状についての話し手の推測を述べ、それが妥当なものかどうか確認している。このように、「らむ」「めり」が上接する例は、現状についての推測の例ばかりなのである。そしてこのことは、「む」がナに上接する例からも言える。「む」が上接する場合も、現状や、極めて近い未来の事態への推測を述べる例に限られているのである。

（38）〔狭衣→僧〕「（飛鳥井姫君ノ）あり所は知りたまひたらむな。幼き人や具したりし」

〈狭衣物語、巻二、二一三〉

（39）〔源氏→紫上〕「今宵ばかりはことわりとゆるしたまひてむな。これより後のとだえあらんこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。……」

〈源氏物語、若菜上、④六四〉

（38）は「今、僧が姫君の居所を知っているかどうか」を、（39）は、「これから女三宮のところに行くことを許してくれるかどうか」を問題にしている。「む」が上接するほぼすべての例が、（38）と同様の例である。一方、（39）は、現実にはまだ起きていない事柄であるが、「今宵」とあるとおり、極めて近い未来の事柄に言及しているもので、この例と前掲の（1）のみである。

このように、現状について推測した例が特に多いのは、

全くの未実現事態への推測よりも、確認への回答がしやすいためである。つまりこの点も、ナが「話し手の見解や認識についての確認」を表すという考えに矛盾しないのである。

次に過去の助動詞である。「けり」の例が多いのは、「けり」にナが下接する場合、その多くが気づきの用法、それも今気づいたという例だからだと考えられる。今、気づいたばかりの事態の場合、その認識に不確実な部分が残るため、聞き手も同じ認識を持っているかどうか、あるいは話し手自身が、その認識が妥当であるかどうか、確認することは十分にありうる。

これに対して「き」は、話し手の記憶や体験に言及する（小田勝（二〇一五））。話し手が自身の記憶に言及する場合、自らの見解を確認しなくてもよいし、話し手しか知らない過去であれば、聞き手は確認されても回答しようがない。唯一例である（22）は、話し手がかつて、聞き手に自分の思いを伝えたという、話し手聞き手双方が共有しているはずの記憶に関するものであった。

以上のように、ナが「話し手自身の見解や認識についての確認」を表すと考えると、その上接語の特徴についても説明できる。

五　本稿の結論

本稿では、中古和文の終助詞ナについて調査し、次の諸点を明らかにした。

・上接助動詞の分布を精査すると、推量の助動詞が多く、推定の助動詞は「めり」以外少ない。また、推量の助動詞では「らむ」が、推定の助動詞では「めり」の例が特に多い。これらは現状への推測という点で共通する。過去の助動詞では、「けり」の例が多く、「き」の例は孤例である。特に「けり」が上接する例は事態に今気づいたばかりという例ばかりであるという特徴がある。

・ナの上接句を見ると、話し手の個人的な見解や認識に焦点の当たる例に限られる。

・ナは、「聞き手側の情報の聞き手への確認」ではなく、「話し手の見解・認識についての確認」を意味するものと考えられる。このように考えると、先行研究や本稿の調査

結果で指摘される事柄についても説明できる。

本稿では、先行研究を検証し、精査することでナの意味を明らかにした。一方、ナの用法の詳細には、未解明の部分もある。また、ナが確認を表すとすると、確認要求の全体像はどのようになっているのかなど、新たな疑問も生じる。これらについては今後の課題としたい。

注

1 竹取物語、伊勢物語、土左日記、大和物語、平中物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語も調査したが、例が見られなかった。

2 コーパス調査には短単位検索を用い、検索条件を「品詞」―「助詞」かつ、語彙素「な」とした。なお、コーパスによる検索のみでは、禁止のナの例を除外することができないので、手作業で除いた。

3 森野は、韻文のナが散文のそれと異なり、聞き手を意識しない例も一定数見られることを指摘している。

4 森野は、ナの心内文の例が、心内描写場面の非常に多い夜の寝覚に多く見られることをもって、心内文での使用が例外的であった可能性を述べる。しかし、ナが聞き手の存在を必須とする助詞であるならば、そもそも心内描写の多い作品には用いられないはずである。

5 対人的意味の最も強い助詞であるナが心内文に用いられることは、一見すると矛盾である。しかし、対人的意味の強さはあくまで相対的に規定されるものと考え、現代共通語の「ね」のように、聞き手が必須となる助詞が古典語にはなかったとすれば、矛盾は解消される。ナはあくまで、ゾやカシなど、中古和文の他の助詞と比べて対人的意味が強いのだと考える。

6 「断定なり」にナが下接した例も一例しか見られなかったが、それも、断定することと確認の意味の相性が良くないからだと思われる。

使用テキスト・資料

・落窪物語、枕草子、源氏物語→新編日本古典文学全集（小学館）
・夜の寝覚、狭衣物語→日本古典文学大系（岩波書店）

・国立国語研究所（二〇一九）『日本語歴史コーパス』（バージョン2019.3. 中納言バージョン2.4.2）https://chunagon.ninjal.ac.jp/（二〇一九年四月一五日確認）
・あゆひ抄→勉誠社文庫

参考文献

小田勝（二〇一五）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
神尾昭雄（一九九〇）『情報のなわばり理論―言語の機能的分析―』大修館書店
此島正年（一九七三）『国語助詞の研究―助詞史素描―増訂版』桜楓社
森野崇（一九九〇）「古代語の終助詞「な」について」『秋草学園短期大学紀要』七

【付記】本稿は令和元年度國學院大學国語研究会前期大会での口頭発表をもとに、加筆・修正したものです。席上、その他で多くのご意見を賜わりました。ここに記して感謝申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費18K12400の助成を受けたものです。